12　　　　　　　　　　　　文法　用言　活用形のまとめ

読解　　人物像をつかむ

新傾向　素材と読み比べて鑑賞する

盗みをするために夜になるのを待っていた盗人は、多くなってきた人目を避けるために羅城門の二階へよじ登ろうとしている。

見れば、火ⓐほのかにしたり。、「㋐あやし」と思ひて、よりのぞきければ、ⓑ若き女のⓒ死にてしたるあり。そのに火を燃して、年ⓓいみじくⓔ老いたるの白髪白きが、その死人の枕上にゐて、死人の髪をかなぐり抜き取るなりけり。盗人これを見るに、㋑心得ねば、「①これはもし鬼にやあらむ」と思ひてⓕ恐ろしけれども、「もし死人にてもぞⓖある。おどして試みむ」と思ひて、やはら戸を開けて、刀を抜きて、「②おのれは、おのれは」と言ひて走り寄りければ、嫗ひをして、手をすりて迷へば、盗人、「こはぞの嫗のかくはしゐたるぞ」と問ひければ、嫗、「おのれがにておはしましつる人のせたまへるを、扱ふ人のなければ、かくて置きたてまつりたるなり。その御髪の丈に余りて長ければ、それを抜き取りてにⓗせむとて抜くなり。助けたまへ」と云ひければ、盗人、死人のⓘ着たると嫗の着たる衣と抜き取りてある髪とを奪ひ取りて、り走りてⓙ逃げて去りにけり。

語注

羅城門＝平安京の南面の門。

連子＝何本もの細木を、縦または横に打ちつけ渡した窓。

鬘＝かつら。

【原文】

見れば、火ほのかに燃したり。盗人、「あやし」と思ひて、連子よりのぞきければ、若き女の死にて臥したるあり。その枕上に火を燃して、年いみじく老いたる嫗の白髪白きが、その死人の枕上にゐて、死人の髪をかなぐり抜き取るなりけり。盗人これを見るに、心得ねば、「これはもし鬼にやあらむ」と思ひて恐ろしけれども、「もし死人にてもぞある。おどして試みむ」と思ひて、やはら戸を開けて、刀を抜きて、「おのれは、おのれは」と言ひて走り寄りければ、嫗手迷ひをして、手をすりて迷へば、盗人、「こは何ぞの嫗のかくはしゐたるぞ」と問ひければ、嫗、「おのれが主にておはしましつる人の失せたまへるを、扱ふ人のなければ、かくて置きたてまつりたるなり。その御髪の丈に余りて長ければ、それを抜き取りて鬘にせむとて抜くなり。助けたまへ」と云ひければ、盗人、死人の着たる衣と嫗の着たる衣と抜き取りてある髪とを奪ひ取りて、下り走りて逃げて去りにけり。

問一　次の「内容わしづかみ」の空欄に本文中の語句を書き入れよ。

［　　　］がついていることを不審に思った［　　　　］が上の階をのぞくと、若い［　　　］の死体の［　　　］を抜き取る［　　　］がいた。［　　　］を抜いて嫗を［　　　　　　］た［　　　　］に対し、嫗は自分の行動を説明し、［　　　　］を求めたが、盗人は死人と嫗の［　　　］、抜き取ってあった［　　　］を奪い、逃げ去った。

問二　波線部㋐・㋑の意味を答えよ（終止形でよい）。〈3点×2〉

㋐〔　　　　　　　　　　〕

㋑〔　　　　　　　　　　〕

問三　二重線部ⓐ〜ⓙの用言について、例にならって活用の種類・終止形・活用形を答えよ。〈1点×10〉

|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- |
| ⓙ | ⓘ | ⓗ | ⓖ | ⓕ | ⓔ | ⓓ | ⓒ | ⓑ | ⓐ | 例 |  |
|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  | カ行四段活用動詞 | 活用の種類 |
|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  | 行く | 終止形 |
|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  | 終止形 | 活用形 |

問四　傍線部①の解釈として最も適当なものを選べ。〈4点〉

ア　もしも若い女が鬼であったらどうしよう。

イ　もしや若い女は鬼であるのだろうか。

ウ　あるいは嫗は鬼なのかもしれない。

エ　ひょっとすると嫗は鬼なのだろうか。

〔　　　〕

問五　傍線部②とあるが、この時の「盗人」の行為の意図として最も適当なものを選べ。〈4点〉

ア　物を奪い取ること。　　イ　正体を知ること。

ウ　恐怖をごまかすこと。　エ　悪を懲らしめること。

〔　　　〕

問六　破線部について、「嫗」は何のためにこのような行為をしていると答えているか。二十字以内で答えよ。〈8点〉

〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

問七　本文から読み取れる「盗人」の人物像として最も適当なものを選べ。〈6点〉

ア　嫗の衣服だけでなく、の物すべてを奪い去ろうとする、欲深い人物。

イ　助けを請う嫗を蹴り倒したうえに、さらに刀を突き付けるといった、冷酷な人物。

ウ　自分を襲ってくる相手にも恐れることなく立ち向かう、勇猛果敢な人物。

エ　の末に、仕方がなく盗人となる人生を選んでしまうような決断力に劣る人物。

〔　　　〕

問八　芥川龍之介は、『今昔物語集』の「羅城門」を素材として、「羅生門」を書き上げた。「羅生門」で、本文５～９行目に相当する場面は、次の【資料】のように描かれている。この文章を参考にした【鑑賞文】の空欄Ⅰ～Ⅵに入る最も適当な表現を、Ⅰ～Ⅳは【資料】の「羅生門」から、Ⅴ・Ⅵは本文から探し、それぞれ指示された字数で抜き出して答えよ。〈2点×6〉

【資料】

　下人は始めて明白に、この老婆の生死が、全然、自分の意志に支配されているということを意識した。そうしてこの意識は、今までけわしく燃えていた憎悪の心をの間にかましてしまった。後に残ったのは、ただ、ある仕事をして、それが円満に成就した時の、安らかな得意と満足とがあるばかりである。そこで、下人は、老婆を、見下しながら、少し声をげてこう言った。

　「はの庁の役人などではない。今し方この門の下を通りかかった旅の者だ。だからお前に縄をかけて、どうしようというようなことはない。ただ、今時分、この門の上で、何をしていたのだか、それを己に話しさえすればいいのだ」

　すると、老婆は、見開いていたを、一層大きくして、じっとその下人の顔を見守った。（中略）その時、そのから、のくような声が、ぎ喘ぎ、下人の耳へ伝わって来た。

　「この髪を抜いてな、この髪を抜いてな、にしょうと思うたのじゃ」

　下人は、老婆の答えが存外、平凡なのに失望した。そうして失望すると同時に、また前の憎悪が、な侮蔑と一しょに、心の中へはいって来た。

【鑑賞文】

　「羅生門」での下人は、まず老婆を［　Ⅰ：２字　］したような気持ちになり、［　Ⅱ：10字　］を感じる。そして同時に悪に対する憎悪の気持ちを冷ましていく。これは正義感に基づいた悪を憎む心に突き動かされているというよりは、ただ、［　Ⅲ：９字　］で、奇妙な行為をしている老婆の目的に興味を持って、知りたくなっているだけではないか。

　下人は、生きるために鬘を作るという、［　Ⅳ：２字　］な老婆の答えに失望する。ということは、下人はもっと想像を絶する理由を期待していたのである。

　失望した下人は、再び悪に対する憎悪を燃え上がらせる。しかし、相手を侮蔑しながら抱く正義感とは、何とも薄っぺらい。善と悪との葛藤、とは簡単にまとめられない不思議な心情である。

　「羅城門」では下人の心理描写はあまり見られず、「あやし」「心得ね」「［　Ⅴ：５字　］」程度である。嫗に対して不気味な思いを抱く点は「羅生門」と同様であるが、「羅生門」ほどに複雑ではない。

　ところで、「羅城門」のこの描写は、現代人の私には未だに理解できない所でもある。下人は、嫗が鬼でも嫌だが、［　Ⅵ：２字　］でも困ると思い、その方が嫌であるかのような言いぶりである。ちなみに、この点をさらに考えていくと、この時代と現代での「鬼」の概念や存在感が全く違うという考察に至ることができるし、ゾンビはいつの世でも怖いという当たり前のことをふと想起させてくれるのである。

Ⅰ〔　　　　　　〕

Ⅱ〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

Ⅲ〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

Ⅳ〔　　　　　　〕

Ⅴ〔　　　　　　　　　　　　　　　〕

Ⅵ〔　　　　　　〕

【解答】

問一　火／盗人／女／髪／嫗／刀／おどし／盗人／助け／衣／髪

問二　㋐＝不審だ　㋑＝理解する〈3点×2〉

問三　ⓐ＝ナリ活用形容動詞／ほのかなり／連用形〈1点×10〉

ⓑ＝ク活用形容詞／若し／連体形

ⓒ＝ナ行変格活用動詞／死ぬ／連用形

ⓓ＝シク活用形容詞／いみじ／連用形

ⓔ＝ヤ行上二段活用動詞／老ゆ／連用形

ⓕ＝シク活用形容詞／恐ろし／已然形

ⓖ＝ラ行変格活用動詞／あり／連体形

ⓗ＝サ行変格活用動詞／す／未然形

ⓘ＝カ行上一段活用動詞／着る／連用形

ⓙ＝ガ行下二段活用動詞／逃ぐ／連用形

問四　エ〈4点〉

問五　イ〈4点〉

問六　死んだ主人の髪の毛でかつらを作るため。（19字）〈8点〉

問七　ア〈6点〉

問八　Ⅰ＝支配　Ⅱ＝安らかな得意と満足と〈2点×6〉

　Ⅲ＝今時分、この門の上　Ⅳ＝平凡

Ⅴ＝恐ろしけれ　Ⅵ＝死人

【現代語訳】

見ると、ぼんやりと灯がともっている。盗人は、「不審だ」と思って、連子窓からのぞい（てみ）たところ、若い女で死んで横たわっている女がいる。その枕元に灯をともして、ひどく年老いた老婆で白髪の真っ白な老婆が、その死人の枕元に座って、死人の髪を手荒く抜き取っているのであった。盗人はこの様子を見て、（行為の）意味がわからないので、「これはもしや鬼であるのだろうか」と思って恐ろしいが、「もしも死人であれば大変だ。脅して試してみよう」と思って、そっと戸を開けて、刀を抜いて、「お前は、お前は」と言って走りかかったところ、老婆はあわてふためき、手をすり合わせてうろたえるので、盗人が、「これは何者の老婆が、こんなことをしているのだ」と尋ねたところ、老婆は、「自分の主人でいらっしゃった人がお亡くなりになったが、弔いをしてくれる人がいないので、こうしてお置きしているのだ。そのお髪が背丈よりも長いので、それを抜き取ってかつらにしようと思って抜くのだ。お助けください」と言ったところ、盗人は、死人の着ている着物と老婆が着ている着物と抜き取ってある髪の毛とを奪い取って、（二階から）駆け降りて逃げ去ってしまった。

【補充問題】

問１　この話をもとに『羅生門』を著した作家名を漢字で答えよ。

問２　次の活用語の、活用の種類と活用形を答えよ。

①「あやし」（１行目）

②「ゐ（て）」（３行目）

③「心得（ねば）」（３行目）

問３　「かくはしゐたるぞ」（６行目）を現代語訳せよ。

問４　「盗人これを見るに、心得ねば」（３行目）とあるが、この時の盗人の説明として最も適当なものを選べ。

ア　死人の髪の毛を抜く者は鬼に違いないと、恐れおののいている。

イ　不気味な行為を続ける者が鬼ではないかと思って、怖がっている。

ウ　死人の髪を抜く鬼に見つからないように、慎重になっている。

エ　謎の行動をとる者に興味がわき、鬼以上の存在だと決めつけている。

問５　嫗は最初どのような目的でこの場所にやって来たのか。簡潔に答えよ。

【補充問題解答】

問１　芥川龍之介

問２　①シク活用・終止形　②ワ行上一段活用・連用形　③ア行下二段活用・未然形

問３　こんなことをしているのだ

問４　イ

問５　亡くなった主人をこの場所で弔うという目的。